
猫

橡

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

猫

【著者名】

【猫】
N 8 4 1 8 E

【あらすじ】

今、即興で書いたものです。これは文学とファンタジーの中間くらいいのものかもしれません。「おれ」と「猫」は果たして?「美醜」とはカラーの違う掌篇第2号。

ふと目を覚ますと、隣で猫が寝ていた。おれは猫が嫌いだ。おれが嫌いなら、向こうもおれのことを好かぬに決まっている。この暑いのに体温のあるものと寝るのは大変な苦痛だ。よし、こいつを追っ払おうと決心した。

しかし、深く眠りこんだものか、なかなか起きない。こんなおれのもとで随分安心しているように思われる。ならば、毛布にくるんで外へおいてこようかとも考えたが、いくら何でもこれは不意打ちである。おれは反則が嫌いだ。もしおれがこいつなら、目が覚めたところが違っていて腰を抜かすにちがいない。夜中おれは下宿の布団で寝たはずなのに、墓場で目を覚ましたようなものだろう。反則でない方法は他にあるだろうかと考えていたら、思いついた。おれも含めて動物は食べ物が好きなはずである。好きでないなら、食わずに既に死んでいるものだが、見たところ猫は生きている。生きているなら食べ物は好きなものだと解釈して冷蔵庫や戸棚を探した。

しかし肝心なことを忘れていた。猫の食うのは梅干しだったかにぼしだったか判然つかぬ。仕方がないから両方用意して、それを外へ放つぽつた。我ながら良い策である。外へ食べ物を放れば猫は外へ飛び出すに違いない。ふと猫を見ると未だ安心しているとみえて伸びをしていた。早く外の食べ物に感づかないものかと、おれはついそわそわしてしまった。やがて猫はゆっくりと戸の方へ歩いていった。これはしめたものだ、と思つていたら何だか様子がおかしい。猫は開いた戸の前に立つたまま食べ物を食おうとしない。ずっと遠くを見ているばかりである。腹が減つていないので鈍感なのか判然しない。

すると向こうから人間の群れではない群れがこちらへやってくるのが見えた。動物である。近づいてみるとわかつた。何百匹もの猫の群れであった。群衆はものすごい勢いでこちら目がけて走つてきただかと思うと全員が全員、にぼしに食らいついた。間違えて梅干しを食う猫は一匹もなかつた。おれは戸も閉めずに啞然としていた。だから悪かつた。胃の満足しなかつたとみえる何十匹もの猫が部屋へ入つてきて部屋中を荒らし始めた。おれは恐ろしくなつて、身一つで部屋を出た。持ち物は何も持たなかつた。ただ気がかりだつたのは、おれの弁当のために買つてあつた梅干しが無駄になつたことだけである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8418e/>

猫

2010年10月10日11時18分発行